いらつめ

第二年八号

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

いらつめ第六十號目次（明治廿三年七月五日）

●文藝美術…炭ぐろ（第三）………………美妙齊主人

○梅雨窓前ょ香を焚く（唱歌、文章）

中山はお子＝紅山＝菊のや露子＝飛縞子＝横山弘子＝撫箏女史＝本吉みほ＝南山女史＝伊藤曉子＝水野秀＝柳巷＝藤元わさ

○親なし子（上）…………蟹の家

○英國婦人雜誌の懸賞小說論

○懸賞小說募集弘告

○鎌倉紀行（一）…………みどりうめ

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓○二錢、四十八部金壹圓二拾四錢○別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢○並別両製共前金領收の上で無くては差上げぬ事○府内に限り無郵税○毎月二回（五日及二十日）發兌○金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局と　ある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事○郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれは妨げ無い事○見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます○廣告料一行金八錢、割引無し

從第五十八號至第六十七號十部版權所有

明治廿三年七月四日印刷｜明治廿三年七月五日出版

發行人　山田武太郎　東京市神田區平永町九番地居住

印刷人　山本鑑之進　東京市本鄉區駒込西片町拾番地居住

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本號の所載は**梅雨窓前**ょ香を焚くといふ唱歌文章　**鎌倉紀行**

美妙子と蟹の家作の**小說二篇**　英國婦人雜誌の懸賞小說論

懸賞小說募集弘告!!!

文藝美術

炭ぐろ

第三

美妙齋主人

癇がつよいと云ふのはつまり我儘、己れに克つ勇氣の無い卑屈の行どまり、胸狭さを人に吹聽せる丈の事、一旦敏才の目に觸れゝばつまり風次第の莽草、西に東にどうとも爲る人間です。畢竟愛すればこそ嫉妬も有る物の、之を助けるのは所謂其胸せまい癇癖が一原因、猜次は即ちこの性質でした。

道傍の桃の花、手は屆くとも隔ての垣が在る以上は拘り合つて狼藉と咎められても詮無い譯。まさ〳〵として主の有る女に戯れる無禮、何として懲らしてくれやう。酒の上とは言ひながら、やはり生酔本性違はぜ、酔眼朦朧として五尺の男が一丈に見えたにしろ、倫理交際の思想が其酒臭い脳から抜けやう筈は無し、つまりは人の權を凌いだ、まさしく人の目を盲にした！

ぐつと無念が胸先に混み上げると、いつか我とわが拳は岩も砕けるとばかり握りつめられた、その鐵拳の引出物、殘の肴に進せやうか。

身はふるへて酒氣が噴く汗が憤怒と共に陽氣にも爲る。已れと片膝立て直しましたが、さて稍思ひ付く處も有りました。

嫉妬なぞする者に得て臆病が多いもの。猜次も同じく此類でした。

尊拳を鷄助に試るのは譯も無い事。夫ながら些し苦勞も有る――もし打ち返されたら何うしやう。と思へば手も出せぬ。出せぬところでやき〳〵傍觀するのは身を斫られるよりつらい。こゝ猴に逐はれて谷に行詰つた心持ちでした。

が、些し氣の安まつたといふのは阿秋が座を外した事でした。何と言つたか、聞いてもそれは不分明、しかし阿秋は馬鹿を突きやつて勝手の方へと立ちました。些し目もさめる。そして見れば正氣にもまた爲る、温和が好手段といよいよ思はれました。一枝吹き折られて喬木は雪を怯れぬといふ顔付き、体よく座をつくろひました。が、今はもう獻酬も否。兎角杯盤を片付けて、やうやく相手を悉く歸しては仕舞ひましたが、さて胸三寸に憂苦三尺、あふれる計り忌々しさ、とつかりと座敷に座つたまゝ。

「阿秋！」とけや〳〵しく呼びました。

「はい、何ぞ御用で？………」

「こゝへ來い。」

膝と膝とをつき合はせて、

「聞きたい事が有る。」

「…………」

「聞きたい事が有るよ。覺えが有るだらう。」

酒氣はまだ冷めず、忌はしい臭ひが紛々と鼻を衝きました。

「おい、これ、貴樣亭主の呼吸がくさいと云ふのか？亭主の呼吸が――これ、そのしな顏をする、是れそれが夫婦か？」

「いゝえ、臭いなんぞ…………」

「馬鹿、そりやアあの男の事だらう。これ、あれ男の呼吸は臭くなくつて己のは臭い？罰あたりめ！」

阿秋もすこしむつとして、

「いつあの方のが……」

「だまれ、見た、證據を見ろ、たしかに見た。」

「どういふ證據……一体何だと仰やるンです？」

「とぼけるなエ、人を馬鹿にして。いたづら女、あれ男とをかしく爲ッて。」

「あのわたしが？」と言ッた頃には阿秋の目はうるみ

ました。「あのわたしがどう……いつ……わたしが何をしましたとえ？」

「知れたことさ、この目に止まッた。さッき人の前で……覺えて居るだらう。あれ男が貴樣から口うつしに酒をもらはうと言ッた。言ッたら貴樣、畜生！口うつしにやッたぢや無いか？」

「あら、ま、飛んでも無い事を。」

「待て。僕が敵へてやらうッてあれ男が貴樣の手を取ッたらう。」

「そりやア取りましたが、振り拂ひました。」

「うんにや振り拂やア爲なかッた。」

「いゝえ振り拂ひました。それに何ぼ何だッて口うつしなんて人間がわるうムいますよ。」

「だれが人間のわるい種を蒔いた？口うつしにしたのを確かに見た。」

是こそ實に思ひも付かぬ濡衣。呆れ果てゝ阿秋はくやしさ腹立たしさ。急き込んだ聲も極度に達して却ッて靜。投げるやうな調子でつめよりました。

「まア本當に貴君もまア……夢にも知らない事を白々しく……

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

口うつしにしたか爲ないか、皆さんの居る前ぢやありません
か……言ひ掛りも大概よ……」
後を言はうとしましたが、泣きすゝりが言葉をくひとめました。身をふるはせて思はず大聲、
「わたしや……くッ……くッ……やしうムいますよ。」
それでも制し切れぬと見えて我とわが手を揚げて己が髮の毛と、よくも思ひ切ッて！むしりました。
蒼ざめた顏一層の凄味を添へ、血ばしッた目を逆立てゝ夫につめよりました。
「さア御殺しなさい、不義をしるなら殺して下さい。覺えの無い事を……明りを立てまよや……外事とは違ひます。さア存分に御ころしなさい。」
むしろ半狂亂でつめよられて賣言葉に買言葉、猖次もむかむかとなりました。
「い丶、覺悟だ、罰あたりめ！」
髻をつかんで引きすゑて、男に向けられぬ拳をこのためて力に任せて滅多打ち。早泣き聲、物音。簪が折れて飛ぶ途端、額を損じてしたゝる血汐、見た二人とも流石にびッくり。
「ちッ……血が……くやしい、毆ッたあ！」

第二十二回懸賞文藝應募得點

題　梅雨窓前に香を焚く

○唱歌

（イ）　中山とお子（マツン）

いで此頃の空あひハ　かさはす日さへなかりけり。
いぬる日塗りし生壁よ　草さへもゆる入梅のさび。
學びの窓ハ戸格子ハ　あけたてにぶく濕りがち。
今日ハ朝より友とよび、　うさをはらしの香合せ。
煙る香爐ハ窓の前　柳よのよふぬれつばめ
黒紗の袖もかをるらん。

評　俳調ながら中々見處があります。

（ロ）　紅山（イセ）

けふりに似たる五月雨に　うさはらすべきよしもなく
窓の戸あけて香たけバ　心ハそめど澄みがたき
古郷ことの思ひ出て　なほもむらがる胸の雲。

（ハ）　菊の舎露子（ナオカ）

旅のこゝろハさゝだれけ　さみしき窓にたゞひとり
などさめかねて焚く香の　かひなく袖ハしめりがち。

（ニ）

浅瀬もふかき此頃は
まらぬとありの客人と
けふりはまどにたゆたふて

同　上

たびの空とてあはさみし。
いつしのあるゝ香あはせ
こゝろはれかぬ五月天。

以上四曲無賞

（ホ）

をやみなくふる五月雨よ
手植は百合もうちだれて、
人のこゝろも曇りぞら、
炷く青煙の薫りのみ

飛鶴子（トウケイ）

緑したゝる下影の
咲ける菖蒲もいろ淡し。
頭ぞたる、柴のとに
沈みしうさをはらすなり。

（ヘ）

かをりくゆらす窓は内
なごめふりしく五月雨の
學びは道もかくてそれ。

横山弘子（カガ）

慰さめかねて庭の面を
軒は雨だれ石穿つ

かをりも高きさだきの
ふるや軒端の玉水の
思ひはそらに消えうせて、

撫箏女史（ミノ）

煙と倶にさみだれの
おと淋しくも物思ふ。
心晴れゆく窓の内。

（ト）

つまどよつぶて！　うめけみおつる。

おともさみしきさみだれの空
はれぬ思ひをなぐさめんとて
まどにひのひつ香をたきぬる。
わゝうもれ〳〵

以上三曲いらつめ一部

（チ）

窓よ匂へる梅か香も
訪ふ人もなきつれ〴〵よ
ふる屋は軒に立ち昇る
かをみとさてや慰まん。

本吉ミは（カガ）

消えてさびしき山里と
心はれぎも五月雨の
かをりたく火はけふりをば

（リ）

はるゝ時なき五月雨に
とざす學びの窓は戸を
うたをはらさんそべにとて
香さへものしくたなびきて
月は世界へしらねども
はあれゆくべき心地せり。

同　上

心もいとゞ結ぼゝれ、
わけてかたらふ友もなく、
焚きくゆらする薄けむり
雲のかけはし天の川
まらぜ〴〵に塵の世と

（ヌ）

つれ〴〵わびし五月雨よ

南山女史（　）

窓さへかすむ伽羅香の

烟はのきの糸水よ　くだくなるさまぞ面白き。

仝　上

（ル）

つれ〴〵わびし五月雨に　香の烟は文字なして
窓の外面にかよふらし　我友待のたまづさよ。

仝　上

（チ）

五月雨のそらよも似たるわが胸を　はらさめやとてなれぶその
ひもとく窓を通ひ路に　香の烟の忍びづる
忍ぶのきはれいとそづに　くだけはてぬるさまぞあはしも。

以上五曲第三等賞　伊東曉子（イロ）

（ツ）

さみだれそめてけふ幾日　ふるやの軒はくちもせむ。
まごころもまへしめるあり。かたる時にも取いでし
むかしをしれぶ掛香れ　かをりてゆかし家とうじ
くもりし心それもきて　またもしむかしにのへりけれ。

右第二等賞

○文章

（イ）　伊東曉子（イロ）

軒の水の音たえせず降る五月雨に友達の音信たえて徒然なるまゝに若葉さす小ぐらき窓の文机によりて、物の本くりひろげ、見ぬ世の人を友としつひる過るまでありしよそも倦みて重やかなる障子おしひらきぬれば、庭の面はくれなゐにはふかげもなく、もありの色のなごりもなし。時を得がほに夏草の巳がまに〳〵茂り行くれぞ。かきくらしたる雲もてころも晴れやらず。せんかたつきて何がなと手箱搔探るに先の日頃母のたまひし香あり。これよきもの得たりと打ちよろこび、香爐のちりはらひもあへずさしくもらするに吾衣あやなもあやしとまでにほふまで、そでたもとの得ならぬ香に通ひ、いとすゞ〳〵しくありぬ。

右いらつめ一部

（ロ）　水野秀（十六）

梅雨！　梅雨はさ快からぬうちに快からぬことはあるまじ。桃の天々たる空も夢とさき、殘鶯去つて子規來る夏のことめよるありぬればしげる木の間れ有時雨一週二週絶えばこそはや廿日に餘る長き日の糸より細きそれ雨に降り込められて

親しき友と往來を絶ちしての詫居！　清き園池を覆ふ高き樹は低く金魚を伴ひ緑間にいろどる榴花は庭一面の苔に映りて幾倍かおもしろく、軒端は梅は實を帯びて閑し――あゝ廣き庭の俗塵を洗ひ盡したその清らかさ！　鳥の音も稀に雷も未だ聞かぬ其靜けさ！　窓底數曲を彈せしとき母は妹を携へて入り來り靜かに坐と占めながら、

「お調べですか」。

「はい庭の眺の余り面白さに……つい……好きな遊びをしてゐました……」

「最前から彼方で調を聞いて心も爽になり茶味も常より格別でした」

「お姉エさんあの遺訓唱歌をしらべましやう？」

「れうそれ〳〵わたしも聞きたい。調べてごらん」

「それは長き思ひつきです……常の樣に用意しましやう」。

母は笑顔殘して起ちました――坐を掃ひ先祖傳來の香爐を取り出して焚く煙は靄散じて麝香の間とあたりに匂り。　樂譜を持ちあげながらたつ煙を見れば、あら不思議。　偶然亡き父の容貌が現はれぬ。　この樂譜こそ見れば思へば愛慕の情はいやまして過ぎし昔の懷かしや、あゝ、思ふ心の蜃氣樓なりしか？　折りも折りさつと降り來る眞白の雨。　軒は滴も音高く、これに伴ふ風さへも肌身を侵していと冷やかなるに吾にかへり一息はつとつく内に母子三人水入らずの一團居――妹の歌ふ聲、顔形より心ばへまですこし分違はぬ亡き父の姿に……父去るもこれ妹あり一木連理の枝陰となり羽翼となりて互に助け助けられ老をかこつ母を愛慰敬養すればわが身の願ひ終る――

「あゝ今日も變らず嬉しく暮した？　遠く蛙の鳴く聲に耳をならひ、近く調をきゝ――夜はまた新聞を讀んで貰ひましやう……」

と陰るゝはせ笑顔含んで樂みたまふ母の心は子のこゝろ――一身三体のこれ家族……嗚呼桃とあり櫻とあり母の心は喜ばせたきものにこそ。

評　修辭はまだ熟しませんが思想は如何にも愛らしい極です。

ひ（八）

撫箏女史（三）

日ごとく〳〵さみだれのふりくらしはとふきすのあれわかす音のみ聞えて、庭はいふもさらありきさはしのはとりにいたるまでみどりてく苔むすさまげにつれ〴〵のたねにこそな

りぬれ。　あゝうもれ〳〵ひるはひねもす夜はよもすがらあまだれのはせをの葉になるこゑいとしげく、友のやせりも泥なす道にさへぎられ訪なふ人もなくていぶせきといはんかたなし。　あはれ〳〵おのがための事もたゞひとりあるのみにこそ。　立のぼるけぶりは心のうされ消ゆるかげにやあるらんうし。

徒然のまゝに（二）

柳　菴（トヤマ）

くさ〳〵取り出でゝよみを待りける文ども、はや大かたよみつくし、かつは倦心の催ほしけるため書物擱遣りて、やをら傍への窓のあたりに進み行き眺むるにひさぶりみ雨なほやまんけしきなし。　軒端にかよふ燕さへ巣にや籠りけん一つだに見えず。　籬にそひたる芭蕉も五月雨に浴みしてしたゞるばかりの艶はありながら首を垂るゝけはひにてさこそと思ひとからるれ。　あたり見まはせば見まはす限と憂さのみぞいやましにける。　かゝるときこそ友慕ふこゝろまされ。　露たがはざらんと打ちかたらふ友たらんには一人ある心地やせんと兼好法師の文集にも見え侍れども今はいかなる友なりとも否まんやはと打ちかまつきは不圖戸口の方に音したりけり。　筧傳ふ水のひゞきにやあらんとおぼつかなくも立出るに、あな親しき友の佇みてありけり。　打ちゑみて書齋に招じ坐につき茶など点ぜるとり友の人しきりに懐かいさぐりて一の包をぞ出しける。　開きぞるにいろ〳〵の香いとをかしく列ある。　彼のいひけるやう、この香はおのれが家に古く貯へあるものにして、いづれが最もしなよきか数多きためおのれ一分にて判じ得ず。　つれ〳〵のまに〳〵わざ〳〵もち来りてともに聞きわかんとす。　おのれ直ちに香爐の煤くらひ、焚き試むるにいづれもまさりおとりなく善き品あれども、わきてこれはよからん、かれはよからんなんど互ひに評しあひけるが袖にも裾にもえならぬ馨り染みて、ひたすら心にくしとぞ思ほゆる。　しめやかなる庵さへ今は仙宮にまがへ、身は恍として天にも昇る心地こそしたりけれ。　友の人口ずさみて、

立ち昇る香の煙のそれならで細くも雨のふりしきるかな

おのれたゞちに

しめやかの五月雨空の香合せつれ〳〵詫る人に見せむや

以上三章第三等賞

藤元あさ（サカヒ）

（六）

おや春枝様ですか。　誰方かと思つてゐましたよ。　此

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

頃のやうに毎日鬱陶しうては眞當に困りますね。」

「何だか氣が大層なまけまして、平生から好きなお琴も嫌ひになつたんですわ。」

「中々何一つも手に着きません。　貴孃御覧！　机の上もあんなに亂れたまゝです。」

「併しお庭はどうも御奇麗ですね。　ほんに能く苔の蔓つてゐますこと。　あれは筍なんですか。　面白い程延びてゐますね。　あの柘榴のいゝこと。　柘榴火の如く窓に當つて明かなりとでも詩人が形容しさうですね。　また降つて來ましたよ。　雨が……」

「どうも憎らしい雨！　獄屋へ入れてはどうでしやうね。はゝゝゝゝ」

「はゝ、飛んだ白河法皇が出來ましたね。　れや最前から忘れてゐました。　お上げ申さうと思つてゐてからに。　手製の詰まらぬ物ですが……」

「何か存じませんが毎度頂戴いたすばかりでは……なに清梅香！」

「さうお禮を言つて下さる物とは違ひますよ。　ほんの名ばかり……お慰みにお焚き下さい」

聞くも床しい清梅香。　焚く香爐の中より一條の烟。　降りしきる五月雨の濕ひに鎖されて重々しう立上る樣もまた面白し。　はじめは「し」の字、つぎには「の」の字……8の字……「M」の字。　上るかと思へば下り、下るかと思へばまた上り、或は横に或は縦に。　くる／＼春山にいづる早蕨の形。　忽まち秋江につゞく篠波の姿！

あゝ此面白いこと。　そして此香のいゝこと。　眞當に清梅香は名に……全く春枝孃のお蔭、併し私が身一人焚くのも余りなの村田の伯母上にも……

「れい乳母や。　憚りだが一寸此紙包を西の伯母さんへ上げていつておくれよ……」

右第二等賞

親なし子

霞　廼　家

其一　上　花よりも賤く孝子の涙

しめやかな昨宵の雨。今朝ハ名殘なく晴れわたり、さし昇る旭日の光り常よりハ麗らか。黒ぞんだ茅の檐頭に炊く煙の靉靆ハ日向の屋根の濡を乾かす陽炎と一ッになつて霞を起す面白さ。一筋の川ハ流れ靜かに水白く、岸の亂杭にハ乙鳥が居ならび飛び來る友を見て二聲三聲。土橋を渡り右に曲れバ五六尺ばかりな畦道にハ車の痕なく又二の字二の字の跡もない、なんともいへぬ春の景色長閑さ。

見渡せバ一叢の竹林の此方に百姓家といふ振の一搆。こんもりと茂つた木立を結び圍んだ槇の生垣に古けた冠木門、茂みの隙からちら〳〵と白い壁瓦の屋根が見えました。吹く風ハ和かに面をなで籬の外彼方の篁裡にハ經よむ鳥の聲妙に面白く緩やかな今日の天氣。此の畦道を南に向てそこ〳〵と木履の歩みいと輕く急がぬ振に行く小娘がありました。その年ごろハ十餘り二ッ三ッ雪より白い瓜實顔、黒目勝の涼しい目、綻びかけた紅梅のやうな唇、眞黒な頭髪ハ束髪で小さな薔薇の花簪を揷してしかも利發さうで、また大人しさうでした。

この小娘の往く右手に青々とした麥畑がある。その畑の側な桑の樹が澤山あるを見て小娘ハ急に立ち止まつて愛らしさうに見て居ました。が、やがて左手で僅に小褄を引き片足を草の中に踏み込み、而して白魚のやうな手をさし伸べてそッと桑の嫩芽を摘みました。摘むと一緒に草の中の片足ハ元の位置に復して、小娘ハ露を含んだ桑の芽をぢッと見詰め輕い息でばッと吹てから頬に當て眼を眠つて居ながら忽ちふと向を見て二三歩往きかけました。小娘と往き違つたハその年頃六十路に近いと見ゆる農夫で、鍬を肩にし腰へ煙管を煙脂を鳴して來ましたがそれと見て小腰を屈め田舍言葉の調子も高く、

「のー孃さん今日ハ天氣が能くて——昨夜の雨でわれ通り彼岸櫻が咲たよ孃さん何所へ………うー今日で確か二日だ阿母さんのお墓參かね、ほんにはや孃さんは孝行者だと阿母さんも嘸ぞ〳〵草葉の影で喜ぶだらうよ＋阿母さんが今に息災で居さしつて斯う成長うならしつたのを見たら十幾何の位嬉しいだらうか思へバ〳〵老少不定と言ひながら此れ老爺などハ遂に一度風邪さいひかねことよ。」

律義一徹の老爺、帯れ間から古手拭を取りちんと鼻をかんで小娘の面を見詰た。その時小娘も唯黙然として明眸に無量の暗涙を浮べ老爺の顔を見て思はず瞼に露を轉ばせ太息を漏しました。

「爺や妾悲しいよ……阿母さんはあれあれ通り。」

と曰ッて常盤木のある方を指さし涙の顔を横に背向けて襦袢の袖に眼を拭ひましたが言葉は一層うるみ勝。

「阿母さんのことは言つて皈らないが唯だ一人の阿父さんのお行衛先が……毎朝阿祖母さんと陰膳を据ゑお日様の出る方と見て阿父さんと思ッて拜んで居ますがまア如何しただらうよねー爺や妾毎日學校で阿梅さんや阿竹さんが阿父さんや阿母さんのことを話して居るを聽てほんに羨しいよせめて阿父さんが居れば如何位心持が強いだらうかねー爺や妾も悲しいよ今日は母さんはお命日だから阿祖母さんと一緒にお香と上げたから、お墓参に行くの、爺や阿祖母さんが一人で話相手がないつて、寂しがるから、話しに御出よ、日増に忙がしうあるだらうすー。」

「嬢さん阿父さんの行衛だつて今に分明るよ、なほ態度心配は事はないよまア折躰角と大切にしでお出て阿祖母さんが夫れに氣丈夫だからなア」

はッと溜息して言葉は途絶れ視線は路傍の若草に集りました。が、老爺は胸の中「繰り事は老は身の常とは曰ひながら平素思たことが遂舌先にすべりでゝ憐れ薄命な此娘を泣かせ父我身老の涙もろく長閑な今日の景色の中で涙に顔を汚させた我罪、思へば頑是ない子供を泣かせたことが愚痴でなつた嗚呼悪かつた悪かつた、せめて言葉で力を添へて遣らう」とて、

「阿清嬢や決して泣かしやるな此は世は塞翁の馬はやうだとて學者が申したが古人の歌にも『何事も今日は歡樂過ぬれば必ず明日の苦患とぞなる』と曰ひましたから必ず阿父さんの居所も知れ親孫子共に一座に話し合ひ今の事も夢は心地で昔噺となることがありましやう程に躰を大事に暮しやれ、やれ〳〵永い立話とした左様ならば阿祖母さんへも宜しう願ひますぞ」

鍬を擔ッて細道の杉菜を踏み別け麥畑のある方へと辿り行きました。　小娘は老爺の後影を眺めながらいそ〳〵と向ふの常盤木にむかつて行きましたが此の常盤木の鬱蔚とした所が即ち阿清の亡母の墳墓でした。

小娘は亡母の墓に行ッて見るに亭々たる松は千年も經たろうと見えて低く枝を垂れて居て其幹の苔は寂び、葉の色は蒼く々として倘繁茂するといふ相を見せました。　圓形に結ひ繞らした疎垣は崩れ墓の邊は一面に杉蓬嫁菜など名も知れぬ草が青々として自由に生茂り菫たんぽゝ薊の花はその間に美しく咲き亂れて居て四下の景色は紅紫青白みな自然に任せて色もあり香もありました。　小娘は朽ち荒れた垣越しに樒の小枝を手折り、而して亡母の墓に供じ若草を褥にして坐しました。

「母上さん……妾清で御座います。」

この簡略なる言葉も判然と他の人には聽えぬ程でした。小娘は袖と口にあてゝ稍垂頭れて居たが僅に首を上げて見れば正面には晴霞院貞譽妙光大姉の文字鮮かにほられ右に明治十年左に二月二日と刻み朝の雨夕の風に暴れた卒塔婆は斜に佇れかゝり此方に向つて答をしてゐるやうに見えました。嗚呼阿清が心の裡は如何でしやう？阿清の心は唯亡母に一目逢ッて見たい阿竹さんや阿梅さんのやうに母上の膝に假寢して見るい日曜日などに母上の前で讀本の復讀をして褒められて見たいといふ情でした。

この世には愛といふものがあッて即ち父母の愛夫婦の愛朋友の愛など此皆己が好きな者を愛し又己を愛する者を愛するものですが。　悲しくも僅少の事からして忽地に勘當となり離縁絶交となるもの。たゞ父母の愛は流石に第一位の愛であつて我子を勘當するも之を思ふの情は全く除らず我子が正い道に立歸ることを願ひ望む情は始終火となり或は水となつて胸腔の裡を去りません。　阿清の眼は平素世上幾多の朋友が慈愛な父母の膝下に撫育敎養されるのと見て之を羨むと同時に黄泉不歸の客となつた母上を追慕しました。　今亡母の墓前に泣き伏して居るその心の程を察すれば鐵腸も寸々に斷れるばかり。よしや宇宙は廣く萬物は多くとも阿清に向つてその眞正な愛を與へる者とてはありません。

阿清は轟く胸を押鎭め震へる腕を差伸して今を盛りと咲き匂ふ菫の花を摘み取り一枝ゝ碑石の前に捧げ殘ッた一枝は己が緑の髮に挿して　靜に立ち上がりました。　が、鮮かな眼一杯に露を湛へ碑石を後に五六歩許り行きかけて思わず振返り見て、聲こそ立てない、わッとばかりに泣き出しました折から撞き出す遠寺の鐘も霞れ與に響してさながら哀を分ッてくれるやう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

英國婦人雑誌の懸賞小説論

英國のガールスオーンペーパーで「無言の物語」と題する懸賞小説を讀者諸孃の中につのッた事と其頃のいらつめに出して置きました。　此度新着の六月分同雑誌五百四十四號を見れば既に調査を終つるとの趣きで、之に付いての同記者の意見がありました。　其意見を讀むところ、頗る思ひ當る處も有りました。　わがいらつめは婦人雑誌の中で懸賞文藝を募集した卒先で、而も其懸賞文藝は毎号大抵欠かさず今日に至ッては既に廿何回といふ處まで數を累ねて來ましたそれもひとへに愛顧諸孃が文學に熱心であられる事の効す處でいつもそれ〴〵記者が夫等文藝に對してはまづ改まッて赤心を以て調査します。　唯それ故懸賞文藝について幾分か經驗もあり、それでガールスオーンペーパーの所論を見れば人事とは思はれぬ處が有ります。　それ故其あらましを譯して見ました。

其前に一寸御斷りして置く事が有ります。　即ち同雑誌の規則は中々堅く、應募者と必らず婦人に限る事とし、それを證するために兩親又は教師の保証狀を添へて原稿を送る事とし、其字も何も一切本人の手に成る事とのたく制限を立て、ありました。　そして原稿調査の上記者が述べた説は即ち左の通りでした。

「概して言へば今度諸娘の應募は甚だいゝ成蹟で、われわれ（同雑誌記者）が思ッたよりは善く出來ました。が、再度の調査を重ねた處でいくらか失望を抱いた處もまた有りました。　投寄の小説類は總數九百種、何れも題を守ッた應募で其中の四百五十種はわるい方でした。　但し滑稽もの、下等な洒落、又は一讀して顔を紅くそる杯の作は一種も無かッたのは大に敬服しました。　文法の間違ひ有るのは大抵無く、唯字の綴りが違ッて居るのが年若のいらつめの作に見えました。　ことに手跡は少くも五百種だけは美事でした。

「以上が結果のいゝ方の側で、善良な教育を受け、而も面倒な題に敢てあるッた勇氣と勉強とが明らかに成蹟となつて現れました。　たゞしかし大に失望したと云ふのは其小説何れも平々凡々、さしたる新奇も無く、觀察の緻密も無く、むしろ極言すれば作者と共に讀者を充分に悦ばせる處、是が欠けて居たことです。　九百種が九百種、いづれも書き詰めた度と似たり寄ッたりで、嶄然として聳えるのは無い方でした。元より短篇小説の頗る作りよくいれも、また新機軸を現す事

れ難いのも知ッて居ますが、しかし或は諸嬢各位がむしろ仲間の諸嬢を目的とし、他の諸嬢の腕にのみ比較を取ッて、古來の大家に比較を取らず、むしろ是でいゝと満足した其邊にも原因が有ッて際立たぬ作を寄せられたのでしやうか？　諸嬢の中には題意が不充分だと抗辨せる人も有りましやう。しかし九百種が大抵一様であるといふ事實はまだ其位の抗辨では消えません。　よしや題意は不充分にしろ、其ための才です。　九百種の中の重な脚色は大抵難船、臨終、戰爭、金の堀り出し、様式の失敗でした。　是は斯うありさうな譯。其故は圖様、寡婦と見える質素な婦人に悲しさうな顔をした小娘、是に趣向と付ければ勢ひ諸嬢が擇んだやうな趣向にも爲りましやう。　只こゝに不思儀なのは應募者の中九十七人までは其小娘の名を「ミュリエル」と命じた事で、この暗合の原因と唯不思儀と評する計りです。　また奇体なのは其寡婦の容貌をバ何れも美とは言はず、それで何れも性質をば善良と言ひました。　小娘の方は諸説紛々、ある人は之を我儘と言ひ、ある人は底意地わるいと言ひましたが、併し四人の中で三人はあどけ無く、之を善良な小娘と評しました。　又九百種の内三百種は其座の悲哀の源を寡婦に歸し、四百五十種は之を小娘に歸し、其餘は種々雑多、寡婦が小娘を叱ッて居るといふのも有りました。　人物の國とバ獨逸、支那、まだかすかる、露西亞等いろ〳〵にしました。しかし多くは英國の田舎の事にしました。　そして愁歎と快活より上手で、景叙の方が性叙よりむしろ立ち越えて居ました（いらつめ記者曰結末の此の一語と英國女性の美術思想をまことによく現して居ました。　注意々々）。

「それで一等賞を受けた人はるしい　ゆうぱんく嬢（英人）。二等賞とらばろんぬ　わしど　ぶえりお嬢（佛人）、其他優等二十七人」。

それで小説は出して有りませんでした故、之と轉載せる事も出來ませんが　しかし同記者の右の評論は頗る究處に中ッて居ます。　之に倣つて當いらつめでも在來の懸賞文藝の外更に別の題を出しました。　御志しの有る諸嬢は御朋友をも勧めて御投寄を願ひます。委細は次号の廣告欄に有ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鎌倉紀行（一）

みどりうめ

鎌倉紀行？ても仰山な！　唯少しばかり調べる事がある故一途に行きたまへとある人に勸められ、急仕度で行ッた迄の事。其ある人とは誰の事か、後に至れば自然と分ります。　原は唯それだけ、われ〳〵若年の何で而白く書けましやう。　しかし前号にも豫告のあつた事。是非とも書かなければ爲らぬ仕儀。「かうある事と知ッたならまだ着目の仕やうも有ッたらうよ」。とは過ぎ去ッての繰り事、古い句ながら十日の菖蒲、後れ祭。　兎に角鎌倉紀行を書く所以は右の通りです。

第一　道中

いよ〳〵明日は出立と極つた其日の空合は縁日に出る見世物師の天幕、地面は此頃下等社會に流行る燒麵麭の附汁と云ふ鹽梅。　明日の天氣は迚も受合ふことは出來ません。　少し心配になつて新聞の天氣豫報を見れば明日の四時頃から風が出るとの事。「なに四時頃では遲い、それでは廢止にして、明後日に延ばさう」。　云ひながら庭に出て空を眺める其いじらしさ！　雫を降るなら今夜の中にどつと降つて明日霽れれば宜いよ。　云ッた處が空は無心！　一向知らぬ風態。却つて人ぢらしに折々小雨を降らせる斗りでした。

其夜の一時？二時頃烈しい雨音に華胥の遊を妨げられました。　目が覺めれば直ぐ出立の事に考が押及びます。「此分では愈々斷念しなければならぬ」。　これに引續いてまた未練の心が其れを辨護しなくも有りません。「斯んなに降れば出かけには多分霽れるだらう」。　僅かに此『だらう』を力にして復た眠に附きました。

眼が覺めた儘マッチを摺つて枕頭の時計を見れば四時少し過ぎでした。　早や昨宵の『だらう』が心に浮んで空の模樣が見たくなる。　見度くなると最早猶豫は爲ません。　直に雨戸を開ければ無慘とも何とも。

いつもなら明い時分。今日に限ッて眞黒な空。　が、何うしたのか時刻れ移るに隨ッて薄らんで來て、五時を打つ頃には余程明くありました。　これが此紀行の抑々です。

急に行くとなッて家内は大混雜。　下女が車を呼ぶ間に朝飯を過ごす其早さ！　其内に車も來る、挨拶もそこ〳〵に家を出たのは六月十五日（日曜日）の午前六時でした。　車は二挺、その一つには例のある人が乘ッて居ました。

家を出てからも車の上で始終空の摸樣を見て居ました。此時の東は空は曇りて居て大陽の顏は見ることが出來ませんでした。　が、曇つて居ると云ふのも名ばかりで其實薄い雲もなく、其上眞中から西の方へ懸けて靑い空も大分見はれて居て望は充分ありさうでした。

家を出た時は二挺相伴なッた車。　今は私のが後れて其間も離れて殆んど一町斗り。　私が心配になつて來た丈け車夫

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

なると心配も層一層に增して來ます。が、其心配も唯だ胸を傷める丈の事で更に効能も有りませんでした。　其内に豊倉橋の前迄來たと思ふと俄然何事? 車の輪は回轉を止めました。　其瞬間私の發言に先だつて車夫が發言しました。

「旦那、橋錢を……」

橋錢? もう時間が逼つて居るのに。『泣き面に蜂』とは實に此樣事を云ふのでしやう! 兎角する中先の車夫が歸へつて來て私の乘つて居た車の後押をして呉れたので漸く發車の間に合ひました。

＊　＊　＊　＊

「私はもう駄目だと思ッて非常に心配しました」。

「私も車を下りるまでは全く氣が付かず……其内に車夫が後れたのを搜して來るつて行つて……それでも見附かつたら能かつたものゝ若し見附からないで、ぐづぐづ待つて居れば汽車は出て仕舞ふんでした。　さうすると家に歸るも面倒だから次の發車まで芝あたりでも——しかし芝あたりは見飽きて居るし、早く行ッて鎌倉で調べたい心は箭のやうだし……」

「さうで厶います……」と私が應じました。

諸孃——此紀行を讀む諸孃! 誰れが私と對話したと思召す? これが先の車に乘つて居た人、即ち美妙齋主人です!

も心配しないでも有りません。　直ぐに待合せをして居た車夫を見附け、「おい、其車ア己が番して居るから先きの車の跡に附いて曳いて行つて呉れねエか?」

開いた口に牡丹餅、早速承知しました。　承知しながら未だぐづぐづして居るのも代價の事か。　え〜面倒なもう先の車が見えなくなッてしまふに。　若し是れが爲め間に合はなかつたら其悔しさも何んなであらう? 思へば自分も焦立つて來ました。

「何だか知らないが代の事なら跡にして急がなけりやア先の車に乘つた方が迷惑をするだらうぢやないの」。

「へい、只今」。

云つたが最後——紙鳶の糸の切れた樣に宙を飛んで駈出しました。　ダ、何にしても先の車でもう一丁餘も離れて居る事。　どうかすると見失ひさうです。　それを車夫と早合点し乘換へる時橫町から出て同じ方へ進んで行く車を夫と思つて居たらしい。　それでも困ると注意をすれば又一層の力を出した樣でもあるが何にしても先の車の曳人も一日に三十里走るといふ優物。　見失ふのは目前の事! 魚河岸の賑ひを橫に見て江戸橋を渡る頃は——まだそれでも二丁位しか後れは仕ませんでした。　それが豊倉橋の見える處まで來た時分は——惡い時には惡いもので間に挾まつた車の爲め——先の車の影も形も見えなくなりました。　斯う